

氏名	今泉裕美子（教授）
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際関係学（International Studies）の方法論…日本のオリジナルな国際関係研究の歴史（特に、文化や社会をも対象とするもの）を植民政策研究を軸に跡づけ、理解するために、国際関係の歴史的展開と現状を行為体の多様化、キー概念としての「関係性」、「総合のなかの専門性の追究」などから研究。</li> <li>・ミクロネシアと日本との関係史、ミクロネシアの地域社会を、アジア及び太平洋島嶼をめぐる国際関係の中で追究。具体的には、①戦前日本の南洋群島統治政策とそこに暮らす人々との関係（移民、戦時動員、引揚げと、引揚げ後の地域社会史との関係）、②太平洋戦争（南洋群島での総力戦の実態や赤道以南のミクロネシアとの関係）と米軍占領（民間収容所や労役などを通じたアメリカの“民主化”・“文化”との出会い）、③委任統治と戦略的信託統治（委任統治の掲げる「文明化」、信託統治の掲げる「自治」「独立」「平和」「安全」）をミクロネシアから検証、④ミクロネシアの戦災からの「復興」、軍事基地化と脱植民地化との関係、⑤南洋群島帰還者の諸活動・戦後ミクロネシアとの「交流」（沖縄、東京を中心とした日本各地）、⑥旧南洋群島を生きた人びとの植民地・戦争経験とその継承、⑦戦後日本の「ミクロネシア協定」から始まる外交関係。</li> </ul>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「第六部第六章世界の中の沖縄第二節引揚げたウチナーンチュ」（財）沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史（各論編第7巻現代）』沖縄県教育委員会、2022年。</li> <li>・「グローバル化と私たち 12移民 日本からの移民」歴史学研究会編『「歴史総合」をつむぐ—新しい歴史実践へのいざない』東京大学出版会、2022年。</li> <li>・「近年の「引揚げ」研究の視点と本書の課題」、「パラオ諸島をめぐる民間人の「引揚げ」」今泉裕美子他編『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016年。</li> <li>・「太平洋の「地域」形成と日本—日本の南洋群島統治から考える」李成市他編『岩波講座日本歴史第20巻（地域論）』岩波書店、2014年。</li> <li>・「南洋群島研究」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011年。</li> </ul>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旧南洋群島経験を次世代に継承すること、あるいはその意義を、ミクロネシアの研究者、教員などと共同プロジェクトで取り組む（代表）。『沖縄県史』（近代、現代）、『具志川市史』（移民・出稼ぎ編）の執筆、県史、市史スタッフとの調査を通じて、地域社会・市民にとっての「歴史」、「国際関係」とは何かの追究。</li> <li>・歌謡、音楽、演劇、絵画、写真、映画、モノ、その他表現にみる「南洋群島」、「ミクロネシア」。</li> </ul>
こんな授業を行なっています	日本の植民地政策とその下で形成された植民地社会、そこに生きた人々の暮らし、仕事、運動、移動など、また彼らにとってのアジア・太平洋戦争と戦後、脱植民地化の過程を、国際関係学、歴史研究、地域研究の方法論の検討を通じて行う。聞き取り、史・資料調査の方法。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米国議会図書館南洋庁関係史料の整理・目録作成マイクロフィルム化協力。琉球大学図書館「矢内原忠雄文庫」南洋群島関係史料の整理・目録作成、「矢内原忠雄文庫南洋群島関係資料展」</li> <li>・ギャラリートーク「赤松俊子の旅した『南洋群島』」原爆の図丸木美術館・企画展「赤松俊子と南洋群島」（2015年3月28日）。</li> <li>・沖縄県立博物館・美術館「美術家たちの「南洋群島」展（2008年11月7日 - 2009年1月18日）」の展示検討委員。</li> </ul>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	北原きよ子さん。1946年樺太アイヌの両親が、第二次世界大戦後に樺太から引揚げた余市生まれ。元関東ウタリ会会長。幼い頃から抱いた違和感、疑問、怒り、悲しみ一つひとつを出発点に、自ら情報を集め、様々な人と話し、学び、問題の特徴を見極め、異なる文化、階層、アイヌ問題に無自覚・無知の人々に向き合い、アイヌが伝統的な方法とする話し合いを通じて問題に取り組む。中曽根元首相の「日本は単一民族国家」発言に批判の声をあげるなどアイヌの権利回復、アイヌの伝統文化の復元を通じて、日本、世界の植民地主義の克服によって真の「インターカルチュラルリティ」が実現できること、を提示してきた。著作に『わが心のカツラの木—滅びゆくアイヌといわれて』（岩波書店、2013）。